論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	金子　貴昭（かねこ　たかあき）
○学位の種類	博士（文学）
○授与番号	甲　第 703 号
○授与年月日	2010 年 9 月 25 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	板木デジタルアーカイブ構築と近世出版研究への活用
○審査委員	（主査）赤間　亮（立命館大学文学部教授） 永井　一彰（奈良大学文学部教授） 中西　健治（立命館大学文学部教授）

＜論文の内容の要旨＞

板木とは、印刷・出版のため、文字や絵図を彫り付けた板をいう。江戸時代には板木を用いる整版印刷が主流となり、情報伝達が書写から出版へと移行し、大量の印刷物が残されることになった。本論文では、奈良大学が所蔵する大規模な板木コレクションをその中心的な研究対象とし、デジタルアーカイブ、イメージデータベースの活用という、情報技術を駆使した新しいデジタル・ヒューマニティーズ型研究の成果として提出された論文である。

提出論文は、序章、終章を含めて、以下に示す全八章からなる。

序章　「板木」を研究資源として扱うにあって
第一章　板木デジタルアーカイブ構築の方法とその意義
第二章　板本の板木　　その基本的構造
第三章　板本に表われる板木の構成　　紙質・匡郭
第四章　佐々木惣四郎の出版記録
第五章　『賞奇軒墨竹譜』の板木
第六章　藤井文政堂所蔵『十巻章』の板木
終章　課題と展望

序章では、研究史上、これまで板木がどのように扱われ、どのように評価されてきたのか。板木そのものの研究としてはどのような動向にあるのかを述べ、出版史、書誌学の根

幹に位置する研究資料でありながら、十分に活用されてきていなかった点を指摘する。この最大の理由として、資料の複製の難しさ、同時に共有化の必要性を述べ、基盤となる研究手法を明確にする。また、本論文全体として解決すべき課題を六ヵ条に亙り明記し、各章の位置づけを述べている。

これを受け、第一章では、本論文の基盤手法である、デジタルアーカイブ、ならびにイメージデータベースの構築について、その設計にかかわる板木の研究資源としての性格を具体的な事例をとりあげながら、デジタル画像化、ならびにメタデータの策定、イメージデータベースの必要性について詳述する。また、構築されたイメージデータベースをもとに、研究活用の具体的な効用について記述されている。デジタル・ヒューマニティーズ型研究手法の典型的な成功事例として特記できよう。

第二章では、板木の基本的な構造について、板本と板木との関係を述べた上で、板木の概要を記述し、基本要素を、外寸、構成、袋・題簽、木札、接合、見当、反り止め、彫りの深さに亙って、新説を随所に入れながら述べる。そして、板木に言及する場合に最も問題となる「入木」については、木材の節を原因とする事例をあげ、板本のみでは解決できない、板木そのものを対象にすることの重要性を指摘する。

第三章では、板木の特徴と性格を踏まえて、板木の存在しない（消滅してしまった）板本の場合にも適応できる普遍的な書誌の解読方法を、板木の存在する十五の板本の事例を取り上げることで提案する。紙質や匡郭の高低差を利用し、かつ木材の側の収縮率という従来の書誌学では全く思いつかなかった新手法を導入している。

第四章では、一転して、書肆が記録してきた「出版記録」を取上げる。現在も古書店として営業を行っている竹苞楼（佐々木惣四郎）が伝えている出版記録について、詳細に検討する。ここでは、実際の板木の現状を比べることで、より正確に出版界の動向について解明できる点を具体的な事例を挙げながら説明している。そして、『酔古堂剣掃』、『梁塵愚案鈔』、『金元清詩類選』の出版過程について、新説を提示することができている。ここでは、板木や出版記録など、関連する情報を撚り合わせることで板本書誌学が完成することを如実に実証した。

第五章では、第四章までに獲得した新たな板木研究の方法論を踏まえ、幻の書物とも呼ばれたこともある『賞奇軒墨竹譜』を事例にとりあげ、いわば整版出版の現場でおきるすべての事象について、網羅的、具体的にその過程を追う。

第六章は、最古の整版出版を行った高野版に関する研究である。板木の形態研究によって、高野版の先行研究の盲点を突く指摘のほか、高野版を狭義に高野山上にある板木、広義に山外にある板木を含むという基本的な定義が明快である。山外板木にあたる藤井文政堂所蔵の『十巻章』について、現存の板木の枠方板木という特殊な形態を粘葉装本、袋綴本両方に対応するためであったことを解明する。藤井文政堂現当主へのヒヤリング、現存板本の博捜、さらには、売買記録文書などから、智積院とその仲介者金屋佐兵衛との関係を導き出している。

終章においては、本論文全体を要領のよくまとめ、さらに課題と展望を述べるが、板木の材料である木材の流通、東アジアの板木文化圏への視野など、本研究の今後の発展性がより強く実感させられるものである。

＜論文審査の結果の要旨＞

本論文の特長の第一は、奈良大学との共同研究をプロジェクト研究型で推進したことである。研究対象である大量の板木をデジタル撮影し、関連する資料も含めてデジタルアーカイブを構築しながら、誰もが「同じ情報」に辿り付くことができ、研究成果に対する客観的評価を可能とする環境を完全に担保した上で、自らの研究成果を並行してあげていくという、きわめて新しいタイプの研究手法である点。第二には、原物の残る板木と、出版記録、板木管理等の断片的な記録・記事、ならびに板本上に現れる現象とを有機的に結びつけて、板本出版のメカニズムを闡明にしようとした研究であるという点である。

このメカニズムの普遍化によって、現在では板木の存在しない板本における板木の実態について推測を可能にしたものであり、日本の書誌学の中で大きな部分を占める板本書誌学に対応させて「板木書誌学」と呼べる新しい学問分野を開拓したという点は、大きな功績であろう。

本論の中で（187P）

板木を研究資源として扱い、板本・出版記録と併せて参照することによって、刊行経緯が明らかになるだけでなく、それに即して現場で何が行われたのかということが、手に取るように判明していった。

板本の物理的な構造はもちろんであるが、板木が出版の現場でどのよう扱われ、どのような操作が加わったのかという情報の蓄積により、本論中に提唱した「板木書誌学」が形成されていく。この板木書誌学こそ出版の現場レベルの情報を伝えてくれるのであり、

これが板本書誌学に還元される時、板本書誌学・出版研究を刺激することは間違いない。

と説くが、板本書誌学・近世出版研究を根底から再構築させるに足る、あるいはその可能性を十分に感じさせ得る論文となっている。

この論文がきわめて特殊な高みにあることは、たとえば、本文中で頻繁に触れられる板木に対応する立命館大学ＡＲＣ蔵の板本が、実は申請者の研究活動の中で蒐集され、ＡＲＣの所蔵品として本人自身の手で登録されたものであること、いわば博捜に博捜を重ねた上で、資料そのものを用意し、データベース構築もそのネットワーク環境の構築から、データ整理、システム開発までを自らの手で行ない、資料閲覧の研究環境まで基盤として用意するという周到な手続きを踏んだ研究活動であり、成果であったことからもわかる。

各章・各節ごとに新見が散りばめられ、読者は、ジグソーパズルが出来上る過程に立合っているかのような興奮すら覚える。たとえば、序章の第一節において、板木にかかわる話題として最も多く取上げられる人物の首の象嵌問題では、人物の似顔をすげ替えることを目的とすることのみの説明がされているが、この説明が実状にそぐわないことへの疑問

などは、これまで考えられて来なかった指摘である。

第一章では、これまでどの所蔵機関・研究機関でも実現できず、筆者が始めて実現した板木デジタルアーカイブの手法を細かく述べているが、２次元画像の取得方法、それを使ったイメージデータベースの構築手順など、今後、立体物を含めた研究資源データベースの構築方法の規範となるものだろう。

第二章の新見は、板木の基本構造を踏まえた上での初めての指摘である入れ木と木材の節との関係で、材料への肉薄を可能とするテーマならではの発見である。

さらに事例を挙げれば、第三章での、紙質や匡郭への視点である。板木というテーマでありながら、紙でできた書籍を小口や柱刻側から分析する点、まったく先人の気づかなかった視点であり、その基本構造の理解の上で、書籍への日常的なアプローチや愛着度が推し量られるものである。

第四章は、文献上の記録と板木の現状、さらには結果としての板本を突合せる手法で、本分野の開拓者の一人である永井一彰氏もすでに行っている方法であるが、この研究の背後にある情報のデータベース化によって実現できた詳細な分析結果が特徴である。

第五章は、本論をまとめていく過程で、幻と言われた本書に板木が存在し、その後、次々と板本が発見されていく様相が叙述されることも醍醐味があるが、こうした出版活動の事象を、幻の書によって具体事例としたところに、本研究によって筆者が獲得した膨大な情報量と知識が垣間見られるところである。

第六章は、現状では、非常に特殊な枠型形状とし保存されている『十巻章』に取上げている。袋綴本を粘葉装本にするための手法であるこの板木の報告自体が全く新発見であるが、これをもとに高野版の定義をより明確にする山外板木の実態解明は、誰も着手していなかった内容であり、記録文書と板木の情報が関係し合い、いわば、点を線に、線を面にして、論が完成していく醍醐味を味わわせる。大覚寺系やその他の寺院の動きについては触れられていないが、今後の展開が十分に期待できる。

終章では、まとめにとどまらず、京都で出版文化が花開いた理由を水運の発達に求めるなど、新見解の指摘であり、すぐにも一篇の論考としてまとめるべき内容のものである。また、課題の一つである国際的な比較板木研究の必要性では、東アジアの出版文化の交流が視野に入っている点も興味深い。

審査においては、本論文の論点に対する瑕疵にあたる指摘は認められず、客観的に淡々と論述する姿勢に対しての高い評価があった。なお、一部に誤植がみうけられるが、博士論文として提出されるにあたっては、慎重に校正すべきであったろう。

しかしながら、「板木書誌学」の語で象徴されるように、これまでの書誌学にはない、全く新しい概念を提示し、新たな書誌・出版史研究の方法を導きだしたことは、高く評価されるものである。

以上の如く、本論文は博士論文として十分な成果が認められるものというのが審査員の一致した意見であった。

＜試験または学力確認の結果の要旨＞

本論文の公開審査は2011年1月14日14時40分から17時まで、アート・リサーチセンター多目的ルームにおいて行われた。申請者は、本学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期課程の在学期間中、本課題に関って、審査のある学術雑誌に２本の論文と、単行本に1本の論文を発表し、学会発表も国内において３回行っている。審査委員会は、これに加え、データベースの公開、その他の様々な研究活動、また公開審査の質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

以上の点を総合的に判断して、本論文は、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、「博士（文学　立命館大学)」の学位を授与することが適当と認めるものである。